

## 山形大学図書館に存する青島鹵獲書籍 - あらたに確認された 83 冊について -

奥村 淳（山形大学）

筆者はかつて「山形大学紀要（人文科学編）」第16巻第1号（平成18年2月）に「山形大学図書館に存する青島鹵獲書籍について その比較文化的考察」を発表し、108冊の鹵獲書籍のリスト及び配分の事情などについて考察した。それは従来存在するとされていた青島鹵獲書籍11冊の10倍近い数であった。また書籍の内容等に言及して、ドイツと日本の軍隊の読書事情などについても言及し、比較文化的な考察も加えた。それらがほとんど青島のドイツ第三海兵大隊の膠州図書館に属していたものであったからである。このたび書庫を再調査したところ、あらたに83冊の鹵獲書籍を確認することができた。それらはおおむね徳華高等学堂図書館（Bibliothek der deutsch-chinesischen Hochschule ; Hochschule とは単科大学をいう）の所有であったとわかる。そのためであろうか、書籍は学術雑誌や法律書など専門書が目立つ。山形大学図書館にも表紙に「大正九年二月青島守備軍陸軍参謀部」と書かれた「鹵獲書籍及圖面目録」がある<sup>1</sup>。志村恵氏によれば、東北大学、新潟大学、金沢大学、京都大学、九州大学にも現存する<sup>2</sup>。表紙に寄贈冊数が記載されているというが、山形大学のものに記載はない。

以下においてそれら書籍を図書館の整理番号順にあげる。〔 〕内の番号は山形大学に存する青島鹵獲書籍の通し番号である。〔1〕から〔103〕までは上記紀要で確認した書籍である。そこにおいては目録類を〔0 - 1〕から〔0 - 5〕と分類しているので、鹵獲書籍は計108冊となる。今回あらたに＜発見＞された鹵獲書籍は〔104〕から〔187〕までの83冊である。合計191冊。これで書庫内の鹵獲書籍すべてがあきらかになったかどうかは不明である。

先の108冊の書籍はほとんどがドイツ第三海兵大隊の膠州図書館に属するものであったが、今回あらたに発見された書籍は膠州図書館所属であったものはむしろ少ない。徳華高等学堂の図書館に属していたものが目立つ。また帝国膠州裁判所(Kaiserliches Gericht von Kiautschou)関係の法律本が幾冊がある。その中には十分に使い込まれ、表紙が解体してしまいそうな状態のものもある。書籍は根こそぎ鹵獲されたということの貴重な証人といえよう。

以下のリストにおいては〔 〕内は筆者のつけた番号である。続く（ ）内は書籍の背中の貼付ラベル等で示される図書整理番号と旧制山形高等学校圖書課の受入番号である。背中の貼付ラベルは三段の、通例の図書館整理ラベルであり、今後の鹵獲書籍検索に有効となるはずである。（ただし現在の日本十進分類法とは異なる。）また旧制山形高等学校圖書課はそれぞれの寄贈書籍に円形のスタンプを押している。それは「受入」関係の記載で

ある。下記の「125」を例にすると、「山形高等学校」が天辺にそして「圖書課」が地辺に存在し、中央に2段となって「第6578号 / 昭和22・6・23」と記入される。後者は書籍の受け入れ期日である。これについては小論の最後に付記する。すべて昭和22年から昭和24年までであることは、〔01〕から〔103〕までの書籍と同じである。寄贈されて25年、それまでの所在あるいは扱いについては解明できていない。

各書籍のほとんどの表紙裏に「假番号/発行年代//著訳者氏名//圖書名目/頁数」を書き込む用紙が貼付されてある。以下のリストではこの「著訳者氏名」と「圖書名目」を原題に併記する。それらがあまりに原文とかけ離れている場合あるいは用紙が欠けている場合は「奥村訳」を添えることにする。

〔104〕(200/1/38;第6561号) ”Fr. D.E.Schleiermacher,Werke. Auswahl in vier Bänden.” Erster Band. Hrsg.von Dr. Otto Braun u. Prof.Dr.Joh.Bauer. Verlag von Felix Meiner, Leipzig 1910

ブラウン/パウアー共編「シュライヤマッヒャー全集 抜粋」 巻一、1910年：徳華高等学堂図書館（スタンプではBibliothek der Deutsch-Chin. Hochschule と表記）

（奥村訳：「シュライアーマッハー選集」第1巻（全4巻））

〔105〕(200/3/38;第6562号) ”Fr.D.E.Schleiermacher.Werke.Auswahl in vier Bänden. Dritter Band. 1910

「シュライヤマッヒャー全集 抜粋」巻三、1910年：徳華高等学堂図書館

〔106〕(200/4/38;第6563号) Fr.D.E.Schleiermacher.Werke. Auswahl in vier Bänden.Vierter Band .1911

「シュライヤマッヒャー全集 抜粋」巻四、1911年：徳華高等学堂図書館

これらは受入番号からすると、はじめから3冊であったと考えられる。

以下は膠州図書館所有のフランスの雑誌「両世界評論」の1886年分(3月－12月)である。粗末な紙に印刷された雑誌で、解体寸前の状態である。(120年以上昔の雑誌であるから、当然と言えるかも知れない。)1831年創刊の政治や歴史なども含めた高級文芸誌で、現在も刊行中である。広告も多く、時代の貴重な資料かもしれない。(以上は多く同僚の学兄磯野暢祐氏の教示をもとにしている。)

〔107〕(200/1/40;第7432号) ”REVUE DES DEUX MONDES” LVI ANNÉE.–TROISIÈME PÉRIODE TOME SOIXANTE –QUATORZIÈME 15. MARS 1886, Paris, 15, Rue de l’Université, 15

（奥村訳：「両世界評論」1886年3月15日号）：膠州図書館

〔108〕(200/2/40;第7433号) ”REVUE DES DEUX MONDES” 1er AVRIL 1886 (4月1日号)

続く号は雑誌名と年号(1886)等は省略する。

[ 1 0 9 ] ( 2 0 0 / 3 / 4 0 ; 第 7 4 3 4 号 ) 15 AVRIL 1886 ( 4 月 1 5 日号 )  
 [ 1 1 0 ] ( 2 0 0 / 4 / 4 0 ; 第 7 4 3 5 号 ) 1er MAI 1886 ( 5 月 1 日号 )  
 [ 1 1 1 ] ( 2 0 0 / 5 / 4 0 ; 第 7 4 3 6 号 ) 15 MAI 1886 ( 5 月 1 5 日号 )  
 [ 1 1 2 ] ( 2 0 0 / 6 / 4 0 ; 第 7 4 3 7 号 ) 1er JUIN 1886 ( 6 月 1 日号 )  
 [ 1 1 3 ] ( 2 0 0 / 7 / 4 0 ; 第 7 4 3 8 号 ) 15 JUIN 1886 ( 6 月 1 5 日号 )  
 [ 1 1 4 ] ( 2 0 0 / 8 / 4 0 ; 第 7 4 3 9 号 ) 1er JUILLET 1886 ( 7 月 1 日号 )  
 [ 1 1 5 ] ( 2 0 0 / 9 / 4 0 ; 第 7 4 4 0 号 ) 15 JUILLET 1886 ( 7 月 1 5 日号 )  
 [ 1 1 6 ] ( 2 0 0 / 1 0 / 4 0 ; 第 7 4 4 1 号 ) 1er AOÛT 1886 ( 8 月 1 日号 )  
 [ 1 1 7 ] ( 2 0 0 / 1 1 / 4 0 ; 第 7 4 4 2 号 ) 15 AOÛT 1886 ( 8 月 1 5 日号 )  
 [ 1 1 8 ] ( 2 0 0 / 1 2 / 4 0 ; 第 7 4 4 3 号 ) 1er SEPTEMBRE 1886 ( 9 月 1 日号 )  
 [ 1 1 9 ] ( 2 0 0 / 1 3 / 4 0 ; 第 7 4 4 4 号 ) 15 SEPTEMBRE 1886 ( 9 月 1 5 日号 )  
 [ 1 2 0 ] ( 2 0 0 / 1 4 / 4 0 ; 第 7 4 4 5 号 ) 1er OCTOBRE 1886 ( 1 0 月 1 日号 )  
 [ 1 2 1 ] ( 2 0 0 / 1 5 / 4 0 ; 第 7 4 4 6 号 ) 15 OCTOBRE 1886 ( 1 0 月 1 5 日号 )  
 [ 1 2 2 ] ( 2 0 0 / 1 6 / 4 0 ; 第 7 4 4 7 号 ) 1er NOVEMBRE 1886 ( 1 1 月 1 日号 )  
 [ 1 2 3 ] ( 2 0 0 / 1 7 / 4 0 ; 第 7 4 4 8 号 ) 15 NOVEMBRE 1886 ( 1 1 月 1 5 日号 )  
 [ 1 2 4 ] ( 2 0 0 / 1 8 / 4 0 ; 第 7 4 4 9 号 ) 1er DECEMBRE 1886 ( 1 2 月 1 日号 )

[ 1 2 5 ] ( 3 5 0 / / 5 0 ; 第 6578 号 ) M.Haberlandt: "Die Literaturen der Perser, Semiten und Türken" Sammlung Götschen, Die Hauptliteraturen des Orients / . Teil. Leipzig, 1902

ハーバランド「東洋文学の主流 第二編 波斯セム及土耳其文学」1902年：徳華高等学堂情報図書館(Informationsbibliothek / Deutsch-chinesischen Hochschule) (「情報図書館」の意味は不明)

これに続く2冊、(350/ /51)と(350/ /52)は鹵獲書籍ではない。昭和22年7月3日山形高等学校図書館受入とあるロシア語本である。ファデーエフ「壊滅」とヴェチェスラス・ポロンスキー「現代文学について」(1928)ファデーエフはスターリン批判直後に自殺し、ポロンスキーはスターリン時代に処刑されたという。(以上は同僚の学兄中村唯氏の教示である)

[ 1 2 6 ] ( 3 5 0 / / 5 4 ; 第 7309 号 ) Gyp: "Les Cayenne de Rio", Paris, Ernst Flammarion, Éditeur, 1899

(奥村訳：ジップ「カイエンヌ・ド・リオ家の人々」): 膠州図書館

表紙裏に紙片が貼付されてある。上半分は円形のスタンプである。円形に添ってまるく「ドイツの防衛 ドイツの名誉 海と陸で 膠州図書館 (DEUTSCHE WEHR DEUTSCHE EHR AUF LAND UND MEER KIAUTSCHOU BIBLIOTHEK)」とある。円形の中央には帆船が描かれてある。そしてその下に「Abt: . Gr.: /Ord.Nr.:

70171」とある。「       」と「70171」は記入である。中表紙の楕円形のスタンプに「Kiautschou Bibliothek ( 膠州図書館/7 0 1 7 1/Tsingtau ( 青島 )」とある。「7 0 1 7 1」は記入である。

ジップ( 1 8 5 0 - 1 9 3 2 )はフランスの女流作家で本名はミラボー伯爵夫人である。  
[ 1 2 7 ] ( 3 5 0 // 5 5 ; 第 7 4 1 8 号 ) Grosclaude: “Pardon Madame !”, Paris, Librairie Ernst Flammarion

( 奥村訳 : グロクロード「パルドン、マダム」): 膠州図書館

「 膠州図書館/ Abt:       . Gr: Ord.Nr: 70173/青島」の楕円形ラベル。紙片によって半ば隠されてあるラベルによって、この書籍は青島の商店から納入されたことが知られる。ラベルは次の[ 1 2 8 ]と同一と思われるからである。

エチエンヌ・グロクロード( 1 8 5 8 - 1 9 3 2 )はフランス作家である。

[ 1 2 8 ] ( 3 5 0 // 5 6 ; 第 7 4 1 9 号 ) Franz Jordain, “Beaumignon” Paris, 1886

( 奥村訳 : ジュルダン「ボミニョン」): 膠州図書館

表紙裏の紙片に「 膠州図書館/ Abt:       . Gr.: /Ord.Nr.:70184」とある。楕円形スタンプはない。表表紙の下方に赤地白抜きでラベルが添付しており、“ADOLF HAUPT/BUCHDRUCKEREI/BUCHBINDEEREI, PAPIERHANDLUNG //TSINGTAU-CHINA”とある。すなわち「中国・青島 アドルフ・ハウプト 印刷製本紙店」の納入と知られる。

これに続くのは( 3 5 0 // 5 7 ; 第 7 4 6 9 号 ) 桜井忠温「肉弾」( 1 9 0 6 ) のイタリア語本である。( T.Sakurai, “Nikudan, Prietilli Umani”)昭和 1 4 年 8 月に世界公論社から発行された非売品本で、山形高等学校受入は昭和 2 4 年 5 月 2 6 日である。かつてアメリカのルーズベルト大統領も賞賛した本であるが故に、進駐軍もこのような<軍国主義的な>本を許容したのか。

[ 1 2 9 ] ( 3 8 1 / / 2 0 6 ; 第 6 5 7 9 号 ) Heinrich Herold, Stephan Reinke u.a.: “Deutsches Lesebuch für Mittelschulen” Band 2. Mittelstufe(4.-6. Schuljahr) Dortmund, Druck und Verlag von W.Grüwell, 1911 .

ヘロルド「中學独乙讀本」第二巻、1 9 1 1 年 : 徳華高等学堂情報図書館

( 奥村訳 : ヘロルド他「中等学校のためのドイツ語読本」)

Nr.1 から Nr.289 までの散文と詩のアンソロジーである。「生活編」「故郷と異郷編」「祖国の歴史編」「太古編」そして「自然を歌う」の 5 つに分かれている。「生活編」は Nr.1「神とともに」(Hermann Klette)から始まり、Nr.5「門番の歌」(シラー)等がある。「故郷と異郷編」は Nr.149「広い世界へ」(Heinrich Bonne)から始まり、Nr.196「祖国と故郷」(Rudolf Baumbach)で終わる。「祖国の歴史編」は Nr.197「大選帝侯と敵」(Wilhelm Pfeifer)から始まり、フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世やその子であるフリードリッヒ大王そしてルイーゼ王妃を扱う散文がある。テオドーア・フォンターネの詩「シュヴェリーンの息

子たち」が興味をひく。解放戦争の愛国詩人ケルナーの「歌い手と英雄」もある。同時代を扱うものとしては現皇帝の体制を賛美する散文が目立つ。Nr.205「赤誠」(Hermann Jahnke)Nr.217「ビスマルク侯」(Theodor von Köppen)、Nr.218「1870年8月6日」(Karl Klein)、Nr.219「1870年8月6日のヴィルヘルム一世とナポレオン三世」(Werner Hahn)、Nr.220「カイザー・ヴィルヘルム勝利王」(Heinrich Hoffmann von Fallersleben)、Nr.222「俟約家モルトケ伯爵」(同上)、Nr.224「我が皇帝の善」(Anton Dietrich)、Nr.225「皇帝の前のパレード」(Arno Fuchs)などがそれである。「祖国の歴史編」はNr.227「祖国」(Heinrich Hoffmann von Fallersleben)で終わる。

Nr.201「フリードリッヒ大王伝」(Bernhard Seyfelt)は<軟弱>だった少年時代から「老フリッツ(der Alte Fritz)」と呼ばれるに至るまでのよく知られたエピソードを中心にまとめたものである。構成も工夫がほどこされ、大王の長い旅に同行した召使が両親に宛てて出した手紙を用いるなどして、自ずと大王の人となりに親しみと崇拜の念が湧くようになっている。老齢の大王の行く先々で「フリッツ父さん、万歳！」の声があがったというのである。Nr.220の「カイザー・ヴィルヘルム勝利王」は現皇帝を扱うものである。「我らを守ってくださる白髪の勝利王とは誰？祖国のためにドイツ全軍と遠征したのは誰？フランスの首都の眼前に立ち、皇帝として帰国したのは誰？/ 汝のため血の戦場で敵を打ち破り、汝を偉大にかつ強くしたのは誰？汝のため死をかけて全世界に抵抗したのは誰？汝、高貴なドイツよ、それは汝のヴィルヘルム、皇帝ヴィルヘルムなり！」皇帝ヴィルヘルム一世(1797-1888)は1870年の普仏戦争時には70歳をとうに越した老齢だったのである。またNr.225「皇帝の前のパレード」によればヴィルヘルム皇帝は軍服姿で、テンペルホーフの練兵場の小高いところに一本だけ立つポプラの下で、中隊、大隊、連隊の行進を閲兵し、終われば将校を集めて本当に忌憚なく講評を加えたことが知られる。

ところで明治神宮外苑の明治神宮聖徳記念絵画館の傍らに「名木ひとつばたご」(絵画館パンフレット)がある。絵画館のパンフレットによれば「幕末から、この付近にあった珍しい樹木で、俗名『なんじゃもんじゃ』・・・現在は二代目」という。明治神宮外苑はかつての青山練兵場である。ここで日露戦争の際に陸軍の凱旋観兵式が挙行された。絵画館の74番「凱旋観兵式」(画家小林万吾)はその時の光景を描いたものである。前景は馬車で閲兵する明治天皇の姿が描かれ、背景は整列する兵士に埋め尽くされている。その中間、右手には一本の大木が見える。それが「名木ひとつばたご」である。絵画集には以下のようにある。「明治39年4月30日、東京青山練兵場で、日露戦争で輝かしい戦果をあげた陸軍の凱旋観兵式が行われ、元満州軍ほか全国各部隊の代表3万1千余名が参列しました。天皇は、式後、諸兵指揮官大山巖以下のお賞めの言葉をたまわりました。絵は、お馬車で閲兵される光景です。絵の右上部に描かれている名木ひとつばたご(通称なんじゃもんじゃ)は後に天然記念物に指定されました。その遺木は、当館内に保存され、その2代目の木は碑石とともに絵画館前庭にあります」<sup>3</sup>。天皇もまた軍服姿である。兵のずっと奥、

彼方には木立も見えるが、この「ひとつばたご」の木はヴィルヘルム皇帝ゆかりのポプラを髣髴とさせるものがある。

[ 130 ] ( 381 / 207 ; 第6580号 ) Aus den Quellen zusammengestellt von Aug. Engelin: "Deutsches Lesebuch für das zweite Schuljahr" Berlin (Wil. Schützes Verlag) 1910

エンゲリーネ「独乙讀本（小学二年生用） 1910年；徳華高等学堂情報図書館

その Nr.213 は Bechstein "Der Hase und der Fuchs（兎と狐）" ("Märchenbuch" 27. Auflage, 1872)であり、Nr.216 は Brüder Grimm "Rotköpfen（赤ずきん）" (Großes Ausgabe, 10. Auflage)である。後者には2匹目の狼が登場する＜後日譚＞があるが、それは省略されている。

これに続く ( 381 / 208 ; 第7143号 ) はメーリケ「プラハへの旅路のモーツァルト」(石川鍊次注解。郁文堂。昭和17.6.15発行の第3版。昭和23.5.1発行。受入期日不明)である。この小説は旧制高等学校でドイツ語教科書としてよく使用された。

[ 131 ] ( 381 / 209 ; 第7268号 ) "Deutsches Lesebuch für die höheren Schulen Württembergs" Dritter Band, Stuttgart (Druck und Verlag von Zeller und Schmidt) 1905 ;

ウルテンベルヒ「高等独乙讀本」第三巻、1905年；徳学高等学堂情報図書館  
シラーの詩「朝の歌(Morgenlied)」を Nr.1として、Nr.7: Hebel "Der Schneider in Pensa" (散文) Nr.80: Hebel "Das Kind am Brunnen" (詩) Nr.91: Brüder Grimm "Otto mit dem Bart" (伝説) など。最後の Nr.130 は Hoffmann von Fallersleben "Mein Vaterland" (詩「祖国」)である。

[ 132 ] ( 381 / 210 ; 第7269号 ) "Rektor R. Dietleins Deutsche Fibel" Leipzig und Berlin (Verlag von Theodor Hoffmann) 1904 ;

ディートライン「 (不明) 独乙讀本」 1904年；(所属不明)

(奥村訳：「ディートライン校長のドイツ語絵入り讀本」)

読み方書き方を含めた総合国語授業のためのテキストで、Dietlein のものを G. Diez と H. Müller が改版したもの。絵はピーダーマイヤーの人気画家リヒター (Ludwig Richter) である。(レクラム文庫「グリム童話集」の絵の作者でもある。) また中表紙に貼付されたラベル "Dietrich Reimer / (Ernst Vosen) / BERLIN S.W. 48 / Wilhelmstrasse 29" からベルリンのライマー (書店) が納入した本と知られる。(納入先は不明)

9. 「学校へ」はあらかじめ準備をととのえ、朝7時、元気よく登校する生徒の様子が描写されている。4名中、先頭の女兒は裸足と見える。皇帝ヴィルヘルム一世に関する部分では、伝記に続いて132. 「皇帝と小さな兵士」がある。プロイセンの国王であったヴィルヘルムは1871年ドイツ帝国の皇帝に即位し、1888年に高齢でなくなった。生前

は勝利王などと呼ばれ、朴訥な人柄も理由として敬愛されていた。皇帝は夏をエムス(Ems)で過ごすことが通例で、それは住民の喜びであった。散歩をしているとき、ひとりの子供が「やさしい皇帝」の膝にしがみついて、「おじちゃんはどうに皇帝？」と尋ねた。「そうだよ」と答えた皇帝は子供に名前を尋ねたあと、「何になりたい」と尋ねた。すると子供は「僕もヴィルヘルムの兵隊になりたい」と答えたというのである。

〔 1 3 3 〕( 3 8 1 / 2 1 1 ; 第 7 2 7 0 号 ) Hrsg. von Putzger, Gäbler und Nasche  
”Deutsches Lesebuch für Volksschule” Ausgabe C/1. Teil: 2. Schuljahr. Zweite Auflage.  
Leipzig (Verlag der Dürsch'sche Buchhandlung) 1909 ;

プッツガー「小學独乙讀本（二年生前期） 1909年：徳華高等学堂情報図書館  
（奥村訳：プッツガー、ゲーブラー、ナッシュ編「国民学校のためのドイツ語読本」）  
発音の初歩から始まる教科書である。Kaiser, Leute, Feier の発音練習等は興味をひく。  
〔 1 3 4 〕( 3 8 1 / 1 / 2 1 2 ; 第 7 2 7 1 号 ) ”Deutsches Lesebuch für höhere Lehr -  
anstalten” Bearbeitung des Döbelner Lesebuchs für Preußen und Norddeutschland in  
engem Anschluß an die neuesten Preußischen Lehrpläne von Direktor M. Evers und  
Professor H. Walz; Dritter Teil: Quarta, Dritte Auflage. Hrsg. v. H. Walze und A. Kühne.  
Ausgabe A: Für evangelische Anstalten. 1908, Leipzig/Berlin (B. G. Teubner)

エヴァース、ワルツ「中學独乙讀本」第三巻、1908年  
（奥村訳：ヴァルツ/キューネ「上級教育機関のためのドイツ語読本。新教の学校用」第  
三巻）（エヴァースとワルツは読本シリーズの監修者で、これはその中のひとつである）  
所属は次の〔 1 3 5 〕と同一と思われる。不鮮明ながら”KAISEERLICHE MARINE  
KOMMANDO DER MATROSEN... KIAUTSCHOU”と判読できるからである。

散文編「 」はドイツの伝説である。”Gudrun”や「哀れなハインリッヒ」、Gustav Schwab  
による「ファウスト博士についての民間本から」や「ほら吹き男爵」ものがある。散文編  
「 」はドイツ史である。グーテンベルク、ルター、シラーの”Katharina von Schwarzburg”、  
フリードリッヒ大王もの、そしてナポレオン戦争の諸国民戦争を扱うものなどがある。  
Nr. 47 「 1870年7月15日ヴィルヘルム国王ベルリン到着」や Nr. 50 「セダンの戦い」  
は普仏戦争勝利をたたえるものである。N52 「 1877年エムスで皇帝ヴィルヘルムを学  
童が訪問」はエムスで保養中のヴィルヘルム皇帝を小学生たちが訪問した記録である。そ  
れは Wupperfeld のバーメン実科学学校(Realschule)の生徒と知られる。1877年6月2  
6日のことである。少年たちに皇帝の命令で急遽コーヒーが出されることになって右往左  
往する関係者の模様とか、だれかれに冗談まじりに話かける様子など、皇帝に対して親し  
みの気持ちがわくしかけになっている。皇帝は行進する隊列を窓から微笑しつつ15分間  
も見守っていたとか、あるいは音楽隊が「私はプロイセン人」を演奏するなか、再度窓辺  
に姿を見せた皇帝に熱狂的な「皇帝万歳！」の声がわきおこったなど、自ずと愛国心や忠  
誠心が涵養されたであろう。

[ 1 3 5 ] ( 3 8 1 / 2 / 2 1 2 ; 第 7 2 7 2 号 ) : [ 1 3 4 ] と同一。1 9 0 8 年出版。

[ 1 3 4 ] と同じ本であるが、付録の部分が違っている。

本の所属として中表紙に以下の円形のスタンプが押されてある。”KAISERLICHE MARINE / KOMMANDO DER MATROSEN... ( 不明 ) / ABTEILUNG KIAUTSCHOU”すなわち「帝国海軍 / 海兵司令部 ( 以下不明 ) / 膠州大隊」である。また表紙裏に貼付されたラベルから、帝国海軍総司令部がおかれていたドイツ・ヴィルヘルムスハーフェンのヨハン・フォッケン書店(JOHANN FOCKEN / WILHELMSHAVEN / BUCHBINDEREI & PAPIERHANDLUNG)が納入したものと知られる。膠州大隊が青島に派遣される前に納入されたのかもしれない。

この本で興味をひくのは、巻末のページの広告である。本を出版したトイブナー(Teubner)社製の少年少女向けの紙工作の広告である。(日本でも戦前に少年雑誌の付録としてそういうものが存在していた)グリムのメルヘン「眠り姫」の舞台と想定されるザバブルク城を彷彿とさせる城やニーダーザクセンの村の教会(農家付き)と並んで「日本の茶店」の組み立て紙工作の広告が並んでいる。「富士屋」と記された茶店の内外には人力車を含めた客の姿がある。水田で作業する人物もいる。この茶店について加えられている説明は注目される。そこには以下のようにあるからである。<日露戦争における旅順港(Port Arthur)の残虐な占領は君たちも知っているであろう。ここでは日本人の温和な面について教えたい。日本人は他の国民に例を見ないほど外国人に対して親切である。生活態度もやさしくかつ温和である。>日清戦争ならぬ日露戦争の際の旅順港の件については筆者には不明である。(日清戦争では大きな国際問題となったことが知られている。)平和的な日本人のイメージが著しい。そして広告は次のように続く。「したがって幸福な日本!といて当然である。彼らのそのような特質をよく示すものは、大きなそして小さな自然の美しさに対する感覚である。豪壮な滝も散る花びらも日本人にものを思わせ、楽しみを与える。

名所にはそれゆえたいい小さな茶店がある。・・・そこではお人形さんのようにかわいい女の子が接待をしてくれる。」(原文のまま)青島で戦い、日本軍の捕虜となった人々のなかにこの本の読者がいた可能性はある。ドイツにおける日本のイメージがこのようなものであったとするならば、坂東をはじめとする収容所の待遇、あるいは周辺の雰囲気などはイメージ通りであった可能性があるということとはできないであろうか。

それはケンペル(Engelberg Kämpfer 1651-1716)が「日本誌」( 1 7 1 2 ; ドイツ語版 1 7 3 3 )で述べているという日本紹介<sup>4</sup>に符号するといえる。

[ 1 3 6 ] ( 3 8 1 / 3 / 2 1 2 ; 第 7 2 7 3 号 ) [ 1 3 5 ] に同じ。1 9 0 8 年出版。

納入した“JOHANN FOCKEN”のラベルがある。中表紙のスタンプの一部は”MARINE (海軍)”と読むことができる。「日本の茶店」の広告もある。

[ 1 3 7 ] ( 3 8 1 / 4 / 2 1 2 ; 第 7 2 7 4 号 ) [ 1 3 4 ] に同じ。1 9 0 8 年出版。

中表紙のラベルは不鮮明であるが、”MARINE (海軍)”と判読可能。「日本の茶店」

の広告はない。

〔 1 3 4 〕から〔 1 3 7 〕までは登録記号からも知られるように、同一の本である。いずれも本文は384ページである。ただ〔 1 3 5 〕と〔 1 3 6 〕は巻末に紙工作についての広告がある。4冊とも膠州の海軍の機関に所属していたと思われる。ただ同じ本を同じ学校に4冊も配分するということから知られるのは、鹵獲書籍配分の作業を急ぎ、その内容についてはあまり吟味しなかった可能性がある。受け取る側の事情は不明である。

上記の本には日本の旧制高等学校むけのドイツ語教科書が続く。たとえば上に続く本( 3 8 1 // 2 1 3 )は本野亨一編「クライストの4つの短編」(三修社、昭和24・5)である。  
〔 1 3 8 〕( 4 0 0 / 1 / 2 4 ; 第 7 2 0 7 号 ) ”Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen an der Königlich Friedrich-Wilhelm-Universität zu Berlin” Herausgegeben von dem Direktor Prof. Dr. Eduard Sachau, Geh. Regierungsrat. Jahrgang .  
Commissionsverlag von W.Spemann, Berlin und Stuttgart 1898. Erste Abteilung.  
Ostasiatische Studien. Redigiert von Prof. Dr. C.Arendt und Prof. Dr. R.Lange. 1898

ランゲ「伯林大學東洋語學科報告第一編：東亜研究」第一巻（以下では書名は「東亜研究」と記す） 1898年；徳華高等学堂図書館(Tsingtau / Bibliothek der Deutsch-Chin. Hochschule)

巻頭に学科長にして枢密参事官ザッハウによる1897年10月18日付「発刊の辞」がある。＜ベルリン大学東洋言語学科(Seminar für Orientalische Sprachen)は1898年から「報告」を出版する。(第一部)「東アジア研究」、(第二部)「西アジア研究」、そして(第三部)「アフリカ研究」の3部門が毎年1巻ずつ発行する。＞「東洋(Orient)」とは西洋に対しての広い意味での「東洋」換言すれば＜非西洋＞である。「東アジア研究」の「報告」が「東亜研究(Ostasiatische Studien)」である。(この「東亜(Ostasien)」とは＜極東＞を指すと考えられる。) Professor Arendt と Professor Dr. Lange が編集人である。ザッハウによれば各報告の任務は、学科で教育している諸言語の研究の促進であり、これまで知られていなかった、もしくはあまり知られていない言語を特に考慮しながら研究を開拓し、向上させることである。言語研究と関連して文学、風俗、習慣、宗教、法概念と法機関、諸民族の史的、文化的な展開を出来るだけ綿密に研究する。学科が成立して10年、この間の内閣と外務省の好意に感謝するが、念願だった予算が1897年7月23日内閣通達(Verfügung)によって許可された。(この「予算」とは紀要発行関係のことであろう)

学科の開設や報告集の発行は、ドイツ帝国が本格的に植民地獲得と支配に乗り出そうとしていることも意味していると考えられる。ちなみにドイツは1898年(明治31)3月6日独清条約によって「青島周辺並びに膠州湾一帯」<sup>5</sup>の99年租借などを実現させた。そうした要求の格好な材料となったのは山東省におけるドイツ人宣教師殺害事件とされるが、それは1897年11月14日のことであるという。

掲載論文はいずれもドイツ語で、A.Forke「北京から長安と洛陽へ」、R.Lange「女大学（封建時代の日本における女性の位置について）」、R.Lange/T.Senga「近世史略（1869年からの日本史）」、W.Barthold「ロシアの東アジア工作」などがある。「女大学」（貝原益軒）は考察の部分とドイツ語訳とローマ字訳の対訳である。

「近世史略(Kinsei Shiryaku)」でランゲは近世日本史についての適当な書がないことを嘆く。ドイツでもっとも知られている近世日本史は山口謙の同書であるという。それは第三編まであり、各編3冊。第一編3冊はすでにアーネスト・サトーが英語に訳している。アメリカ人の来日から1868年までを扱う。第二編（1875）は1869年から1874年の台湾征討までを扱う。第三編（1880）は1877年の薩摩の反乱までである。この論文は「近世史略」第二編第一冊（1869年 1873年はじめ）の独訳である。「解説」では天皇(Kaiser)が権力(Macht)を再構築する経緯に関心が強い。そこでは天皇は日本の「正当な支配者」とされている。

（次巻以下も日本を扱う論文を中心にその内容に言及する。）

〔139〕（400/2/24；第7208号）”Ostasiatische Studien” Jahrgang . 1899  
ザッハウ「東亜研究」第二巻、1899年；徳華高等学堂図書館

論文としては R.Lange/T.Senga「近世史略」（第二編第二冊；1869年からの日本史概略）、R.Lange”An unabridged Japanese-English Dictionarý”、A.Forke「秦 漢時代の金石文煉瓦」、Joh.Warnecke「北スマトラの文学研究」、W.Barthold「ロシアの東アジア工作」、G.Arendt「中国王朝史のための共時的支配者一覧」がある。

「近世史略」(独訳)によれば1873年1月に神武天皇の即位日である2月11日と今上天皇の誕生日である11月3日が祝日と定められ、東京はじめ全国6箇所に大きな鎮台、3箇所に小さな鎮台が設置された。北条県（現岡山県）と鳥取県における反乱、（北条県の反乱は1873年5月勃発）福岡県の農民反乱、佐賀の乱に言及。続く「第二編第三冊」は1874年3月の蕃地事務局の設置と台湾征討、Li Hang Chang（李鴻章）について述べ、西郷、大久保及び中国在英大使の功績で戦争にいたらなかったが、なによりも中国は軍備不備であり、政府、国民ともに戦争への意欲はなかったとしている。第二冊には反乱軍の要求が述べられている。その第一は自分たちの居住地域の外国人通過禁止である。他に物価値下げ、新暦廃止、丁髷復活、国民学校廃止がかかげられている。

しかしこの250ページの報告集でもっとも興味をひくのは「学科報告(Seminarchronik)」ではないだろうか。そのなかには1898年2月から1899年復活祭までに判明したという学科関係者31名の就職状況の報告がある。たとえば「1. Heinrich Betz, 法学博士、司法官試補(Referendar)、通訳見習い(Dolmetscher-Eleve)として上海領事館」とある。「司法官試補」とは上級国家試験合格者をいうようである。それぞれ出身地も記載されている。プロイセンはじめ北ドイツは圧倒的に多い。この傾向は以後もずっと続く。「2 . Gustav Specke, 法学博士、司法官試補、通訳見習いとして、北京公

使館」,「3 . Hermann Ensinger、同上、北京公使館」,「8 . Ernst Wagenführ、法学博士、司法官試補、通訳見習いとして、帝国膠州政庁」,「9 . Erich Wagenführ、同上」,「10 . Walter Neitzel、同上」,「11 . Otto Günther、試補(Assesor)、個人の資格で膠州へ」12番以降はアフリカ赴任の軍人が目立つ。またシュレスヴィヒ・ホルシュタイン出身者である農場主が帝国東アフリカ政庁の庭園士として就職している。

ところで「個人の資格」で膠州へ行ったとある Otto Günther (オットー・ギュンター) について瀬戸論文に詳細な記録がある<sup>6</sup>。それによれば1870年生まれであるから、この時点では30歳前ということになる。青島では枢密参事官・総督府民政長官として、総督府官吏のなかで総督と高等判事につぐ3番目の高給であったという。1918年5月に青島警察監房から坂東収容所に移された。1912年12月再び青島に移送されたが、妻子は大戦終結後まで青島にとどまっていた。ギュンターは学歴からして中国語ができたと考えられる。俘虜時代は徳島の歯科医宮井氏と懇意だったという。ドイツ語だけではなく、たとえば漢字を用いた交流も考えられる。

ベルリン大学東洋言語学科はドイツ帝国のアジアやアフリカ進出に大きく関わっていたことがわかる。

[140](400/3/24;第7209号) "Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1900

「東亜研究」第三巻、1900年;徳華高等学堂図書館

論文としては C.Arendt「中国王朝史のための共時的支配者一覧(続)」, A.Forke「中国の財政税制」, R.Lange「日本の国民学校唱歌」, R.Lange「日本の子供の歌」、W.Barthold「ロシアの東アジア工作」などがある。

「日本の国民学校唱歌」は“Kimi ga yo”や“Miyasan”の翻訳がある。(miyasan は “Mein Prinz”、すなわち「わが皇太子」と訳されている。)日本のメロデーは単調で趣味にあわないとか、知識とモラルの推進という教育目的が特徴で、ドイツでは大事な宗教の要素がないと指摘している。また「子供の歌」では日本の子供の歌は日本人の心情と生活の理解にとって重要であるとしている。“dajina otsukisam kumome ga kakusita”などが独訳されている。

「学科報告」によれば1900年冬学期、学生数(Mitglieder)は190名である。17名の教員(Lehrer)と8名の講師(Lektor)がいる。1899年7月講師 Dr.T.Senga が辞任して京都大学教授となった。後任は Dr.K.Tajima である。その勤務は1900年3月までで、そのあとを引き継いだのは R.Makita である。学科の外国語は15に拡大された。中国語、日本語、グジャラト語(インド)、ヒンドスタン語、現代アラビア語(シリア語、エジプト語、モロッコ語)、ペルシア語、トルコ語、スワヒリ語、ヘレロ語、ハウサ語、ドアラ語(カメルーン)、エフェ語(トーゴ)、ロシア語、現代ギリシア語、スペイン語である。

また1899年夏学期の卒業試験の合格者が5名いる。トルコ語2名以外は日本語である。1 . Karl Vogt、2 . Karl Mecklenburg、3 . Alexander Fuehr-Weinert の3名で、

いずれも法科学生である。このうち Karl Vogt ( 1878 - 1960 ) は瀬戸論文の「2330」に一致する<sup>7</sup>。のち東京のドイツ公使館に勤務し、日本におけるドイツ人弁理士第一号になる。「日本語に堪能」という素養はベルリン大学で築かれたものであろう。「ある日本在住のドイツ人の人生記録から」( 1962 ) という日本に関する著作があり、神奈川県二宮町の広大な敷地の邸宅に住んでいたという。( [ 143 ] 参照 )

1899年2月 1900年10月にアジアとアフリカにおいて官職を得た17名の学科関係者の名前がある。トルコ・ドイツ大使館やカメルーンの帝国部隊の少尉として赴任している。「7 . Rudolf Schellehorn」と「14 . Theobald Schleiffer」も現職が郵便会計係と郵便助手で、郵便役人として膠州に赴任。郵便助手も郵便役人として上海に赴任した郵便助手もいる。

[ 141 ] ( 400/4/24 ; 第7210号 ) "Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1901

「東亜研究」第四巻、1901年；徳華高等学堂図書館

論文としては R.Lange 「日本の女性の名前」がおもしろい。ヨーロッパでは研究も少なく、かつ間違っていることも多いという。Miss Bacon "Japanese girls and women" はよい本ではあるが、女性の名前については「注」に少しあるだけ。Lange は梅や雪など自然現象からとられる名前について言及したあと、男の子は下層階級ではしばしば熊、虎など動物からとられる。また虎吉、熊蔵などは女性の名前にもなる。さらに「東京、京都、大坂、青森などの有名芸者の名前」の研究にすすみ、それぞれ独訳と説明を加えている。たとえば「Aikichi 愛吉 Liebe-gut, glücklich」のごとく。最後は源氏名の研究である。源氏名は「源氏物語」に由来すると説明したうえで、「Y gao 夕顔 Abend-Gesicht ( かぼちゃの一種 )」などとある。( Abend 夕方、Gesicht 顔である ) W.Barthold 「ロシアの東アジア工作」もある。

学科報告によれば1901年と1902年の復活祭をはさむ1年、夏学期は111名の学生と4名の聴講生。冬学期は173名である。夏学期には中国語特別コースが作られ、陸軍将校12名と、海軍(Marine=Infanterie)2名が受講したという。また講師 Dr.Tajima の後任として R.Makita が赴任した。Makita は夏学期末には離任し、東京出身の Suyewe Iwaya が後任となった。また熱帯研究やドイツ・東アフリカ、西アフリカ・ドイツ植民地研究および植民地経済・政策の実業学科(Realienfach)が創設されたという。1900年夏学期の卒業試験の11名の合格者の中に中国語4名、日本語2名の名が見える。いずれも法科学生である。日本語は「5 . Max zur Nedden、法科学生」「6 . Rudolf Schott、同」である。( zur Nedden は著名なゲルマニスト Otto C.A. zur Nedden の係累であろうか )

1900年と1901年の復活祭の間の1年に38名がアジアとアフリカで就職している。

「1 . Alexander Fuehr-Weinert、法学博士、司法官試補、日本公使館通訳見習い」「2 . Hans Wirtz、哲学博士、帝国膠州政庁通訳見習い」「3 . Graf Adolf von Götzen、参謀本部大尉、ドイツ東アフリカ長官(Gouverneur)」以下12名の大尉、中尉、少尉がアフリカ

へ赴任。郵便関係でアフリカや中国に赴任したものもいる。

[ 1 4 2 ] ( 4 0 0 / 5 / 2 4 ; 第 7 2 3 8 号 ) “Ostasiatische Studien” Jahrgang , 1902  
「東亜研究」第五巻、1902年；徳華高等学堂図書館  
( 編集者のひとり Carl Arendt 教授の追悼号である。 )

R.Lange「日本の女性の名前一覧」は794の名前とその意味の研究である。「1 . Afuri ( On 音 ) 阿富利」「4 . Ai ( 音 ) 愛、Liebe。愛という字はカイザーの側室の名前として例外的に Naru である。」( 大正天皇生母の柳原愛子を意味している )。また R.Kunze ( 仙台 ) 「日本の民間抒情詩について」は抒情詩歌における日本の下層階級と教養階級の断絶を指摘。ほかに新ボンメルン、ピスマルク諸島の貝殻貨幣の研究や、中国の信仰の自由の問題 ( 英文 ) そして「済南府(Tsinanfu)における中国の大学」論では、中国における実用的教育の要望の増大がいわれている。また Barthold「ロシアの東アジア工作」もあるが、満州進出をねらうロシアと清国の秘密協定が暴露されたのは1901年1月3日であるという。それは「清国から満州の宗主権を奪う」<sup>8</sup>ものであった。

1901年夏学期の学生数は120名、1901年から1902年の冬学期は190名。卒業試験合格者のうち、中国語8名、日本語4名である。また1901年の復活祭から1902年復活祭の間にアジアとアフリカで就職した者31名。北京公使館に3名、膠州帝国政庁に2名、上海領事館に1名などである。ドイツ・東アフリカ出身の地方役人で、カロリン諸島パナベ島副総督への就任者や、退役軍人鉄道会社など膠州・山東の民間会社就職者も2名いる。

[ 1 4 3 ] ( 4 0 0 / 6 / 2 4 ; 第 7 2 1 1 号 ) ”Ostasiatische Studien” Jahrgang . 1903  
redigiert von R.Lange und A.Forke

「東亜研究」第六巻、1903；徳華高等学堂図書館

Arendt にかわって A.Forke が編集者に加わった。第5号は182ページであるが、第6号は317ページである。

Fritz「チャモロ語文法」、Hermann Plaut「台湾島研究」、A.Forke「南中国の方言とその北京語との関係」そして Barthold「ロシアの東アジア工作」に混じって、R.Lange「日本の紋章」がある。ここではヨーロッパでは15世紀に消滅した紋章が日本では今でも盛んに使用されていて、その研究は風俗研究に貢献するとある。「早引定紋鑑」( 大坂・森本太助 ) を土台にして、紋章の考察と1314という膨大な紋章の図版と考証である。

1902年夏学期の卒業試験合格者は中国語11名、日本語1名。( Walter Knoblauch 法科学生 ) 中国語合格者のうち6名が法科学生である。また1902年から1903年の復活祭の期間にアジア・アフリカで就職したものは25名である。「3 . Rudolf Walter」、  
「4 . Gustav Wilde」の2名が「司法官試補、通訳官見習として北京公使館」、「5 . Karl Vogt、司法官試補、東京ドイツ公使館」である。「6」から「25」はすべてアフリカである。

{ 144 }( 400/7/24 ; 第7212号 )"Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1904  
「東亜研究」第七巻、1904年 ; 徳華高等学堂図書館

Hahl「ボナペ島の日常語研究」、A.Forke「Mu Wang と Saba の女王」、H.Haenisch「Sang Sesten の中国の反応。モンゴル原典との比較における東モンゴルの歴史」、Friedrich Hirth「青銅鼓についての中国の見方」に混じって T.Tsuiji「貝原益軒論」がある。

{ 145 }( 400/8/24 ; 第7213号 )"Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1905  
「東亜研究」第八巻、1905年 ; 徳華高等学堂図書館

R.Range が明治37年に発行された日本の軍用手票について述べ、デザインや文言を翻訳している。この考察によれば1円 = 2 マルク、1 銭 = 1 マルクである。

{ 146 }( 400/9/24 ; ) )"Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1906  
「東亜研究」第九巻、1906年 ; 徳華高等学堂図書館

( 山形高等学校にかかわる号数は判読不可 )

全422 ページであるが、日本に関係した論文はない。

{ 147 }( 400/10/24 ; 第7239号 )"Ostasiatische Studien" Jahrgang , 1907  
「東亜研究」第十巻、1907 ; 徳華高等学堂図書館

法学博士 W.Müller「日本語公用文書例文集」は実例をもとにしたものである。たとえば明治38年1月17日付け「神戸税務署長税務官某」の「独逸國領事館御中」の原文とその独訳がある。また1905年(明治38)7月19日に豊後海峡でドイツ船と日本の海軍水雷艇の衝突にかかわるドイツ・Flensburg 海事裁判所の裁定について外務大臣が独逸特命全権大使に宛てた文書もある。

{ 148 }( 400/11/24 ; 第7215号 )"Ostasiatische Studien" Jahrgang . 1908  
「東亜研究」第十一巻、1908年 ; 徳華高等学堂図書館

日本関係では T.Tsuiji 訳「( 福沢諭吉 ) 現代婦人と少女のための指針」がある。Tsuiji は冒頭で福沢諭吉の業績と伝記を解説している。1900年にカイザーから5万円の功労金を下賜されたことから知られるように近代教育の最大の功労者である。旧社会とそのモラルを批判し、自由な思想を輸入したとして、「西洋事情」を紹介している。

「学科報告」によれば1907年から1908年にかけての冬学期の学生数302名。そのうち実用ロシア語の学生として郵便と鉄道の役人が14名。教師30名、講師14名。1908年夏学期は学生数222。日本語講師プラント氏(Herr Plant)が日本のカイザーから旭日六等勲章(die 6. Klasse des Ordens der "Aufgehenden Sonne")を授与されたという。27名の卒業試験合格者のうち、中国語7名、日本語8名。日本語は「8 . Alexander von Falkenhausen、中尉」、「9 . Werner Rabe von Pappelheim、中尉」、「10 . Fritz Hartog、中尉」、「12 . Fritz Kämmerling、中尉」の軍人4名に続き、政府建築技師や法科学生である。なお最後は「( ロシア語 ) 27 . Margarete Michaelsen、作家」とある。

1907年8月から1908年の間にアジアとアフリカで就職したものは71名である。

以前と比較すると大幅な伸びを示す。中国関係 11 名、日本関係が 5 名。アフリカ関係が多く、たとえば「23. Kurt von Stegmann und Stein, 中尉。シュレジア出身。ドイツ・東アフリカの帝国守備隊将校として」などとある。郵便や税関も含むが、東アフリカ、カメルーンそしてトーゴなどへの軍関係が圧倒的に多い。51 名のうち「1. Walter Trittel、司法官試補、帝国公使館(北京)通訳任用予定者(Dolmetscheraspirant)」と「6. Friedrich Mohr、司法官試補、帝国膠州政庁通訳任用予定者」は瀬戸論文に詳しい<sup>9)</sup>。それによれば Trittel(総督府通訳・戦時志願兵)は 1904 年海軍入隊、1912 年に予備少尉である。また Mohr は 1906 年判事補試験合格、同年 10 月 1 年志願兵としてケルンで「応召」。1907 年 4 月ヴィルヘルムスハーフェン海軍歩兵第三大隊本部配属され、4 月膠州派遣。兵役義務終了後「膠州総督府司法官試補兼通訳官」という。「東亜研究」の該当記事は兵役義務終了後を指すのであろう。

71 名の中には日本語卒業試験に合格したばかりの「19. Fritz Hartog」と「20. Fritz Kämmerling」のふたりが含まれる。二人は大尉に昇進して、「修学目的のため日本行き命令(zu Studienzweck nach Japan kommandiert)」とある。また「9. Waldemar Amann、医学博士、上海ドイツ学校校長」、「10. Karl Franz、哲学博士、上級教師、中国のドイツ学校校長」、「11. Karl Kaiser、教師、同上」、「12. Johann Franz、哲学博士、上級教師、同上」、「13. Johann Aring、教師、同上」である。「14. Hans Taubert、大尉、中国の帝国駐屯部隊将校」以下 4 名の中尉、少尉が Taubert 大尉同様に中国に赴任。軍人であっても将校には当該国の言語を習得させてから赴任させるというのは、長期的視点に立たなければ出来ないことである。

〔149〕(400/12/24; 第 7216 号)“Ostasiatische Studien” Jahrgang .1909

「東亜研究」第十二巻、1909 年；徳華高等学堂図書館

論文としては Dr. Hauer「中国の行政改革」が 100 頁を超える力作である。他に Fritz Weiß「Bhamo から Tongyue へ」、R. Lange「日本における漢字書き方の特徴」、P. Albert Tschepe「中国中部の低地 - 地理的・歴史的研究」、Alfred Forke「ひとりの中国人カント崇拜者(1908 年 8 月 14 日コペンハーゲンで開催のオリエント学会議「中国と日本」部門の講演)がある。Lange 論文は行書、草書、楷書の研究である。また Forke 論文によればこの 10 年中国では「椿姫」(小デュマ)、ホームズ、「ディーヴィッド・コッパフィールド」などのヨーロッパ小説が人気。スペンサーの実証哲学は中国人、日本人の趣味にあった。観念主義も中国、日本で崇拜者がいて、そのことは 1902 年と 1903 年に横浜で中国改革党の雑誌「新民叢書(Hsin-min ts'ung-pao)」が亡命者だった梁敬超によって発刊されたことから知られる。

学科報告によれば冬学期の学生数は 292 名。そのうち実用ロシア語の学生として郵便と鉄道役人が 13 名、聴講生 23 名。夏学期の学生数は 250 名。教員 32 名、講師 14 名。1904 年から日本語助教をしていた Hermann Plaut が 1909 年 3 月に急逝した

という。卒業試験合格者は14名で、中国語4名、そしてアラビア語・モロッコ語、ペルシア語、ロシア語、トルコ語、日本語各2名である。

1908年から1909年の1年間にアジアとアフリカで就職したものは61名である。日本関係はなく、中国関係10名以外は、ほとんどドイツ・東アフリカ、トーゴ、カメルーンである。軍人が多いが、政府・裁判所関係の役人以外に、森林監督官やその助手なども見える。中国関係は以下である。「1. Enno Bracklo、司法官試補、北京公使館通訳見習い」「2. Wilhelm Wagner、同上、ヘッセン大公国出身」「5. Johannes Ziehe、海軍大佐、青島（膠州）帝国政庁港湾管理官」「6. Gottfried Dehio、法科学生、東プロイセン出身、中国海上税関」「51. Hans Schumann、商人、上海の貿易会社へ」「53. Gustav Berg、教師、中国のあるドイツ学校教師」「54. Hermann Burdenski、教師、同上」「55. Philipp Orlob、教師、同上」「56. Theodor Spelin、教師、同上」「61. Franz Huhn、見習い宣教師、宣教師として南中国へ」以上のなかで「2」、「6」「55」は瀬戸「青島ドイツ軍俘虜」の「2351」、「419」そして「1656」と一致する<sup>10</sup>。拙論によってWagnerが北京公使館勤務の役人だったことが確認される。（ただ「2351」の説明によればWilhelm Wagnerは化学関係者らしく、上記「2」とは別人の可能性もある。）Dehioが中国海上税関勤務だったことも同様である。またOrlobが本国で教員をしていて、中国のドイツ学校に赴任したことが知られるが、この「ドイツ学校」が瀬戸論文における「青島・独中大学（徳華高等学堂）」を意味するかは不明である。

〔150〕（400/13/24；第7217号）”Ostasiatische Studien” Jahrgang ,1910  
「東亜研究」第十三巻、1910年：徳華高等学堂図書館

日本関係の論文としてはH.G.S.Ströhl「日本の紋章学(Heraldik)の模倣」とR.Lange「日本のカイザーの詩選」そしてHell大尉「日本の慣用的文字」がある。Lange論文は明治天皇の歌の独訳を伴う。日本では一般にカイザー夫妻は詩の形で考えや気持ちを表明してきたもので、とくに皇后がそうであった。近頃は天皇も自分の考えを詩で表明するのに大変たくみになった。その多くの詩は極度の公正さと真の感性が表現されている。中国の戦争で一人息子を失って悲嘆に暮れていた老農夫が「こらは皆軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらん(Hin zum Gefilde der Schlacht sind / alle Söhne gezogen; Nur ein Greis wird allein schützen / die Felder am Hag)」(明治37年)という天皇の歌を知って臣下の義務を思い出して涙したほどであるという。明治43年(1910)当時、今上天皇の御製を公然と批評するなど日本では考えられないことである。

学科報告では1909年から1910年にかけての冬学期の学生数289名。卒業試験に19名が合格。中国語7名、日本語5名、トルコ語5名などである。中国語関係は法科学生3名、中尉2名などであるが、日本語関係は法科学生1名以外は少尉、中尉、待命海軍将校(Fritz Blomeyer)など4名である。1909年から1910年の1年間にアジア、アフリカにおける就職者は67名で、アフリカ関係がほとんどである。中国と日本関係は

以下である。「1 . Franz Kuhn、法学博士にして司法官試補、北京の帝国公使館通訳官見習い」、「2 . August Balser、司法官試補、同上」、「3 . Wilhelm Stoller、同上」、「4 . Walter Dirks、司法官試補、東京の帝国公使館通訳官見習い」、「5 . Kurt Sell、同上」、「7 . Walter Strzoda、法科学士、中国海上税関役人」、「6 1 . Wilhelm Arps、教師、中国のドイツ学校教師」、「6 2 . Hans Jensen、同上」、「6 3 . Max Rosenkranz、同上」、「6 4 . Theodor Lange、同上」である。このうち「6 3 . Hans Jensen」は瀬戸「青島ドイツ軍俘虜」の「1 0 9 8」である<sup>11</sup>。瀬戸論文によって、「中国のドイツ学校」が「天津ドイツ中学校」であることが知られる。これにベルリン大学でおそらく中国語を学んだという事実が加わることになる。

〔1 5 1〕〔4 0 0/1 4/2 4;第7 2 1 8号〕”Ostasiatische Studien”Jahrgang . 1911.  
「東亜研究」第十四巻、1 9 1 1 年; 徳華高等学堂図書館

日本関係の論文としては M.W.de Visser「日本の迷信における蛇」( 英文 ) と、R.Lange「1 8 6 9 年における日本の領主の数」がある。中国関係では Joachim Schulze「青島から南京へ」が興味深い。それによると青島で教練を終えたあと、任地の南京へ3 週間の休暇を利用して陸路赴任を計画した。将来の条約開港海州(Haichou)はあまり知られていない故、港とその一帯を調査することが目的であるという。写真まじりの旅行記が興味深い。高蜜(Kaomi)を1 9 0 9 年1 1 月3 日出発したが、ここではドイツ人駅長が泊めてくれた。また牧師の Blumenhard と小学校教師王鑑清の助力があった。( 済南鉄道・高蜜駅は現在青島・四方駅から約4 0 分の距離 ) 南京到着は1 2 月4 日早朝である。またこの紀要には「ベルリン大学創立百周年に対する京都大学祝辞」なるものが、祝辞の写真を添えて掲載されている。「學運全国二冠絶。普国多年敵国ノ難ニ苦ミ・・・上下興リテ振興ヲ図リ」などと、大学とドイツ帝国の「至大ノ関係」をたたえている。日本からの留学生はおおむねベルリン大学で学ぶとある。

学科報告によれば1 9 1 0 年から1 9 1 1 年の冬学期の学生数2 9 6 ( 女性1 4 ) 、1 9 1 1 年夏学期は2 0 8 名 ( 女性3 ) で、冬学期の教員数3 3、講師1 3 である。創立百年を機に日本語教員 Prof.Dr.Rudolf Lange が第四等王冠勲章を授与されたという。翌年1 月にはアラビア語教員も同様に叙勲された。1 9 1 0 年1 0 月卒業試験合格者は1 6 名。中国語と日本語はそれぞれ1 名である。「1 . Ernst von Warnsdorf、大尉」、「7 . Werner von Zepelin、中尉」の二人である。また1 9 1 0 年から1 9 1 1 年の間にアジアとアフリカで4 9 名が就職した。ドイツ・東アフリカ、カメルーン、トーゴの守備隊将校などが目立つ。ブラジルに外務省委託で教員として赴任したものも3 名いる。「5 . Fritz Blomeyer、待命海軍大佐、東京の帝国大使館に配属」とある Blomeyer は「東亜研究」第1 3 巻で言及されている。

〔1 5 2〕〔4 0 0/1 5/2 4;第7 2 1 9号〕”Ostasiatische Studien”Jahrgang . 1912  
「東亜研究」第十五巻、1 9 1 2 年.; 徳華高等学堂図書館

日本関係の論文としては Kohlshorn「日清戦争に関する日本の参謀本部報告」、R.Lange「関が原の戦い以後の領土」、Ernst Tobias「日本政府の委託により 1911 年ドレーデン国際医学・保健展示会のためにまとめられた医学・保健文書」がある。「参謀本部報告」の筆者は現役中尉とおぼしく、かつて当学科で学んだようである。これは参謀本部の記録（第一巻冒頭）の「忠実な翻訳」であり、学科講師の Tsuji 氏の協力があつた。これは単なる翻訳ではなく、戦争にいたる朝鮮をめぐる対立の前史が述べられている。

学科報告によれば 1911 年 10 月から 1912 年 8 月の冬学期の学生数は 257（女性 8）、1912 年の夏学期は 216（女性 8）である。教員は 33 名、講師は 14 名である。冬学期の言語数は 22 で、ヤウンデ語（カメルーン）、エヴェ語（ガーナ）、ナマ語（かつてホッテントットと呼ばれたコイコイ人の言語。ナンビア、ボツワナ、南アフリカ）そして英語が新しい。授業は冬学期は 8 時から 21 時、夏学期は 7 時から 21 時である。（大学の授業が朝 7 時からでしかも夜 9 時までというのは、さすがプロイセンの伝統というべきか。）卒業試験合格者のうち中国語 4 名、日本語 3 名である。中国語合格者は「1. Friedrich Krause、中尉」、「2. Alexander Kühn、中尉」、「3. Ernst Busch、法科学学生」、「4. Gustav-Adolf Sakowski、法科学学生」である。日本語合格の「5. Armin Kohlhepp」、「6. Hans Kolb」そして「7. Lothar Siemon」はいずれも法科学学生である。また 1911 年 8 月から 1912 年にかけてアジアと東アフリカで 79 名が就職した。ほとんどがアフリカで、しかも軍関係よりはドイツ語学校教師が目立つ。「1. Georg Scheffler、司法官試補、帝国北京公使館通訳見習い」、「2. Hans Traut、法学博士、司法官試補、帝国北京公使館通訳見習い」、「4. Wilhelm Plage、司法官試補、東京の帝国公使館通訳見習い」のなかで、「2. Hans Traut」は瀬戸論文の「2276」と同一人と考えられる<sup>12</sup>。Traut は北京公使館赴任後 2 年たらずで青島で日本軍俘虜となって日本に送還されたことになる。瀬戸論文によると終戦後は北京大使館に赴任したという。（ベルリン大学で中国語を習得していたことが新たな事実ということになる。）

「東亜研究」の第十五巻（1913 年）以降は見当たらない。学科関係者には東アフリカ就職者が目立つわけであるが、アメリカ映画「アフリカの女王」（ハンフリー・ボガード/キャサリン・ヘップバーン；1951 年）はまさにドイツ領東アフリカを舞台にした 1914 年 9 月の物語である。当時の雰囲気について参考となるものがある。

以下はオランダ・ライデン大学「東洋研究通報(T'oung Pao)」である。財団法人東洋文庫に 1900 年から現代の分まで存在するが、それ以前のは貴重であろう。山形大学図書館には 1890 年の創刊号から存在する。（途中まで）現在も Leiden の Brill 書店から出版されていて、2008 年版は第 94 号である。ただ「T'oung Pao」という表題は同じでも、副題は「International Journal of Chinese Studies」と変更されている。

掲載論文はフランス語が多いが、ドイツ語と英語も少なくない。以下では英語論文のみ

原題を表記し、それ以外は日本語訳をあげる。

[ 1 5 3 ] ( 4 0 0 / 1 / 2 5 ; 第 7 2 2 0 号 ) ”T'oung Pao. ARCHIVES POUR SERVIR À L'ÉTUDE DE L'HISTOIRE, DES LANGUES, DE LA GÉOGRAPHIE ET DE L'ETHNOGRAPHIE DE L'ASIE ORIENTALE

(CHINE, JAPON, CORÉE, INDO-CHINE, ASIE CENTRALE et MALAISIE)”

Redigées par MM. Gustave Schlegel (Professeur de Chinois à l'Université de Leide) et Henri Cordier (Professeur à l'École spéciale des Langues orientales vivantes et à l'Ecole libre des Sciences politiques à Paris) Vol. . Leide, E.J.Brill 1890

シュレーゲル「東洋研究通報、第一巻第一号」1890；徳華高等学堂図書館

(奥村訳)「通報 東洋の歴史、言語、地理、民族学の研究(中国、日本、朝鮮、インドシナ、中央アジア及マレーシア)」第1号、ライデン(E.J.Brill 書店)1890)

Gustave Schlegel (ライデン大学中国学教授) と Henri Cordier (現代東洋言語特別学院及パリ政治科学学校教授) の編集による。444 ページ、ハードカバーの重厚な書籍である。はじめに「発刊の辞」があり、論文の使用言語はフランス語、ドイツ語、英語である。Cordier「18世紀ビルマのフランス人」、Friedrich Hirth「中国における紙の発明」、Geo. Phillipp「The identity of Marco Polo's Zaitun with Changechan(with a sketch-map of Marco Polo's route)」などの論文がある。

[ 1 5 4 ] ( 4 0 0 / 2 / 2 5 ; 第 7 2 4 0 号 ) ”T'oung Pao” Vol. . 1891

「東洋研究通報」第2号；徳華高等学堂図書館

Henri Cordier「18世紀ビルマのフランス人」(仏語)、Fr.Kühnert「中国の暦」(独語)、Gustave Schlegel「Christmas-trees in China」(英語)などにまざって、ベルリン大学「東亜研究」でおなじみの R.Lange も「古今和歌集の夏歌」を発表している。Schlegel「『北蝦夷圖説』論」がある。また R.Lange「日本の日常語」の批評も掲載されている。Lange の古今和歌集の研究は、それが万葉集と並ぶものであることが指摘され、紀貫之の「序文」が高く評価されている。そして賀茂真淵の「打聴(KOKINWAKASH UCHIKAGAMI)」と本居宣長の「遠鏡1(KOKINWAKASH T KAGAMI)」が研究に重要であるとされている。「夏哥」の「1 . - 1 5 .」が独語訳されている。たとえば”1 . Dai sirazu,yomibito sirazu / / Waga yado no ike no hujinami saki ni keri / yamahototogisu itsu ka ki nakamu.”は以下のように訳されている。”Anlass und Dichter unbekannt. //Schon erschlossen sich am Teich meines Heimes der Glycinie Blüte, / Kukuck im ferner Gebirg', wann wirst du rufen bei mir ?”

Schlegel の論文は「北蝦夷圖説」の紹介である。ロッテルダムの民族博物館に存在するという。間宮倫宗(林蔵)、秦貞廉の著で、圖はすばらしいと評されている。われわれはアイヌの民族誌は知らないも同然なので、日本学者による全巻の翻訳が望まれるとある。子供を板にくくり、立たせた姿勢ですするという授乳の描写などはさうとう奇異な感じを抱か

せたはずである。(東京国立博物館に江戸時代の川原慶賀による同じ構図の絵がある。)

[155](400/3/25;第7221号) ”T'oung pao” Vol. . 1892

「東洋研究通報」第3号、1892; 徳華高等学堂図書館

August Gramatzky 「古今和歌集の古日本の冬の歌」(独語) G.Schlegel 「日本のミカドと将軍の名前一覧及びその治世下の年号一覧」(英語) が興味をひく。Gramatzky の論文は冒頭で、Hoffmann の「日本語文法」の一節「文法の立場からはやまと言葉は日本語の本質と構造をもっとも明確にする」が引用する。そして Wilhelm Schott と Rudolf Lange に導かれて日本語の学習を始めて、中国語からの借用からまだフリーだった古くて、混じりけのないおよそ千年前の Yamtatokotoba の研究に努めているという。理性本位の西洋人は雪、月、梅、桜花、ほととぎすが繰り返し登場することに微笑するけれども、自然愛好家(Naturschwärmer)である日本人にはかえって自然に対する西洋人の無関心を笑うのではないか。すべての歌が過度に日本的なわけではなく、普遍人間的な感情やどこでも美しい(überall schön)歌の本質が存在している。そして可能な限り短い形式であるだけにいっそうわたしたちにうったえるものがある。そして Gramatzky は1番から13番まで日本語原文を並べたあと、それぞれのドイツ語訳を試みている:

1番 ”daisira zu/yomibitosira zu // Tatsutayama/nishiki orinasu/Kamnadzuki / shigure no ame wo/tatenuki ni shite” は ”Veranlassung (und) Dichter unbekannt // Auf dem Tatsutayama/ webst die Brokat,/götterloser Monat,/den Sprühregen/zu Kette und Einschlag machend.” と訳されている。「神無月」を文字通り「神々のいない月」と訳したところなど、苦心のあとがうかがわれる。

それに続くのは日本語/ドイツ語の対照表である。たとえば momidgi /rot werden (紅になる) Momidgiba/Ahornblätter (楓の葉)のごとくである。さらに「冬の歌」の漢字と日本文字、楷書、草書、ひらがなの対照表まである。この論文は50ページ近い労作である。

[156](400/4/25;第7222号) ”T'oung Pao” Vol. .1893

「東洋研究通報」第4号、1893; 徳華高等学堂図書館

F.W.K. Müller”「ある日本の Samsâra の絵についての研究」は日本のある寺の掛け物であって、すでに1887年にベルリンで紹介された。しかし紹介は不十分であるので、あらためて考察を加えるというものである。この掛け物は「五越生死輪 (Das Leben- und Todesrad der fünf Pfade)」という題である。仏教の教えに従うならば神々も無常(Mu-j ; Sanskrit:Antiya=Unbeständigkeit)の掟に従うとか、あるいは「無明(mu-my ;Sanskrit: avidyâ=Unwissenheit)」とある。(「無明」とは<知らないこと>と訳されている) Müllerによれば、挿絵のいくつもが表現されている概念に符号指定内容に思われ、その究明のためにはより古い中国とチベットの手本に戻らなければならないという(Müllerは仏教研究において今でも名前が残る碩学らしい)。

[157](400/5/25;第7226号) ”T'oung Pao” Vol. . 1894

「東洋研究通報」第5号、1894年；徳華高等学堂図書館  
〔158〕(400/5 - 2/25；第7224号) ”Supplement au volume du “T'oung Pao”  
Die Länder des Islâm nach chinesischen Quellen” von Prof.Dr. Friedrich Hirth, 1894

「東洋研究通報」第1巻第5号補遺、1894年；徳華高等学堂図書館  
ヒルト「通報補遺 中国の資料によるイスラム諸国」1894  
巻頭の編集部による「読者へ」によれば、中国学者(Sinolog)ヒルトの「イスラム諸国」の第一論文である。アラブ研究家の関心を呼ぶであろう。速やかに発表するためにライデン大学の著名なアラブ学者 Dr.M.J.de Goeje の校閲を経ている。全64ページのうち、6ページ分が Goeje の注と解説になっている。

〔159〕(400/6/25；第7225号) ”T'oung Pao” Vol. . 1895

「東洋研究通報」第6号、1895年；徳華高等学堂図書館  
F.W.K.Müller の『和漢三才大図会』から」は D.Braun 「日本のメルヘンと伝説」(1885)の中から、駿河「羽根の衣」)をとりあげている。Mitford と Chamberlain もこの版には言及していないという。

〔160〕(400/7/25；第7226号) ”T'oung Pao” Vol. . 1896

「東洋研究通報」第7号、1896年；徳華高等学堂図書館  
Karl Florenz, 「日本の詩歌(白菊)」(1895、Leipzig/Tokyou)の書評がある。評者は A.Gramatzky である。Florenz がベルリン大学東洋ゼミナールの最初のメンバーのひとりであることや、東京大学教授であることなどが紹介されている。薫窓(三島雄之助)と芳宗(新井周次郎)の典雅な挿絵付であることや、東洋ゼミナールの最初の日本語講師井上哲次郎が中国語からドイツ語に訳したものを Florenz が翻案したものであることなどが知られる。評者は白菊の運命を物語るこの作品は文学好きには魅力があるが、井上がつけた「夜間帰郷」と「愛人の恩」はむしろ感興をそくと批判している。

〔161〕(400/8/25；第7227号) ”T'oung pao” Vol. . 1897

「東洋研究通報」第8号、1897年；徳華高等学堂図書館  
F.W.K.Müller 「能面についていささか」 P.Lefevre Pontails 「タイのインドシナ侵攻」 C.de Harlez 「サンスクリットー中国語の仏教語彙。続」 K.Himly 「『満州語の鑑』における遊戯の部。続」 G.Schlegel u. E. von Zach 「二人の満州 中国皇帝外交官」 S.H.Schaank 「古代中国語音声学、」などの論文が並ぶ。「東洋研究通報」の東洋研究の幅と深さを示している。Müller の能面論は52ページに及ぶ力作である。Müller は日本文化事典編纂への貢献を意図している。この能面論の第1章は能面のリストである。「1.Akujô 悪尉」から「74.Zô 増」までと、「75.阿瘤 Akobu Greisen-Maske (老人の面)」から「104.野千 Yakan Fuchs-Maske (狐面)」までの詳細な研究である。ベルリン帝国博物館所有の能面に日本人によって「野千 yasen」と鉛筆で書いてあるが、それは正しくないなどの指摘もある。また W.Wang による Heinrich Winkler 「日本人とアルタイ人」の書評もある。こ

の本は日本人とアルタイ民族の親近性の研究であるという。

{ 162 }( 400/9/25 ; 第7228号 ) “T'oung Pao” Vol. . 1898

「東洋研究通報」第9号、1898年；徳華高等学堂図書館

日本関係の論文として Henri Cordier 「日本と朝鮮の状態」がある。批評として Karl Florenz 「日本書紀或年代記」( 1896 - 97 ) の評がある。世界史的にも日本民族学にも価値がないこの書を翻訳、注解した忍耐は驚嘆するばかりとある。(皮肉であろうか) 文中の「金嬰」は「金鎖」であって、「金嬰」という概念はない。本来「常鎖盗賊」を意味するのに、「嬰」と間違っただけでは、「常子供金属盗賊」となってしまって意味をなさない。「全くばかげている」と手厳しい。

{ 163 }( 400/9 - 2/25 ; 第7229号 ) ”Supplement au volume . du ”T'oung Pao” :”Les étude chinois(1895-1898)” par HenriCordier

「東洋研究通報」第9号補遺(支那語研究) 1895年 - 1898年；徳華高等学堂図書館；Cordier の中国語研究である。

{ 164 }( 400/10/25 ; 第7230号 ) ”T'oung Pao” Vol. . 1899

「東洋研究通報」第10号、1899年；徳華高等学堂図書館

Emile Rocher 「燕南の王子の物語」、Karl Himly 「『満州語の鏡』における言語の部、第6」などの論文。また Paul Brauner 「新しい法律 技術表現一覧。日本語辞書のために」は日本の司法改革に鑑み、法律用語集あるいはもっと将来的には日独辞典の実現を望む。そのためのささやかな貢献であるという。

{ 165 }( 400/B - 1/25 ; 第7231号 ) ”T'oung Pao” Série . Vol. . 1900

「東洋研究通報」第2巻 第1号、1900年；徳華高等学堂図書館

1900年からは第2巻となっている。Gustave Schlegel”The secret of the chinese method of transcribing foreign sounds”、Henri Cordier 「中国の革命」、Gustave Schlegel”First introduction of tea into Holland”などの論文がある。

これに続くはずの第2巻第2号(1901年)は見当たらない。

{ 166 }( 400/B - 3/25 ; 第7232号 ) ”T'oung Pao” Série . Vol. .,1902

「東洋研究通報」第2巻第3号、1902年；徳華高等学堂図書館

Gustave Schlegel”On the invention and use of fire-arms and gunpowder in China, prior to the arrival of Europeans”(中国における火器と火薬の発明、ヨーロッパ人到着に先立って)、M.de Marelles「太平天国の乱回想」、S.H.Schank「古代中国語音声学」、M.Paul Doumer”Situation of Indo-Chine(1897-1901),Report”に混じって、Gramatzky “Shichi k Z shikan no uta”すなわち「七高造土館の歌」が異彩をはなっている。第七高等学校の校歌1番と2番がドイツ語に訳されている。「その一 薩摩の國は西海の浜、健児の生まれし處なり」は”Satsumaland am Strand des Westens !”と始まる。大久保、西郷という帝国の指導者たる英雄が生まれたところと続く。「その二 薩摩の國は九州の端、正気の宿りし

處なり / 天正の役戌辰の變太閤をささえ 王事に勤む」は”Satsumalnd in äußersten Kushu ! /Dir wurden Söhne hellen Verstandes, /Vor Taik furchtlos, dem Kaiser treu ”と訳される。これは「九州の端の薩摩国！ 汝には明るい悟性の息子が生まれた。太閤のためには勇敢で、カイザーのためには忠誠な」と訳することができる。「明るい悟性」が「正気」なのである。

{ 167 }( 400/B-4/25 ; 第7233号) ”T'oung Pao” Série .Vol. .1903

「東洋研究通報」第2巻第4号、1903年；徳華高等学堂図書館

M.de Marolles「太平天国の乱回想（完）」や Henri Cordier「ハノイ東洋会議」などに混じって、Dr.A. Gramatzky による薩摩方言集が面白い。薩摩弁を Satsumanisch（薩摩語）として、Futsugo（普通語）と対比している。kokeke は koko ye koi となるなどがある。”Der Kagosima Shiritsu KyouikkwaiZassi”（鹿児島県私立教育会雑誌）に発表したものらしい。

{ 168 }( 400/B-5/25 ; 第7234号) ”T'oung Pao” Série ,Vol. .1904

「東洋研究通報」第2巻第5号、1904年；徳華高等学堂図書館

J.Takakushi ” The life of Vasu-bandhu by Param rtho(A.D.499-569)、F.W.K.Müller「賭餅。善男善女の中国版」などの論文。Félix Régamey ” Japon ” の批評もある。

{ 169 }( 400/B-6/25 ; 第7235号) ”T'oung Pao” Série ,Vol. .1905

「東洋研究通報」第2巻第6号、1905年；徳華高等学堂図書館

中国、モンゴル、インドシナ関係の伝説論文に混じって、英日条約、露日条約、日朝条約が紹介されている。

{ 170 }( 400/B-7/25 ; 第7236号) ”T'oung Pao” Série .Vol. .1906

「東洋研究通報」第2巻第7号、1906年；徳華高等学堂図書館

編集者のひとりが Gustave Schlegel から Edouard Chavannes になっている。

{ 171 }( 400/B-8/25 ; 第7237号) ”T'oung Pao” Dirigée par Henri Cordier et Edouard Chavannes . Série .Vol. .1907

「東洋研究通報」第2巻第8号、1908年；徳華高等学堂図書館

編集者は Henri Cordier と Edouard Chavannes である。全729ページは全巻でもっとも大冊である。

A.Forke「トルキスタンのイスラム経典」、P.S.Rivetta「外国語名前の書換」、E.H.Parker “The “Nestorians” once more”( nestorian とはネストリア教徒である )、Martin Hartmann「アラビア語の中国語変換」などの論文。仏日条約、英露会議、露日協定などについて。「シャヴァンヌ（Chavannes）の中国への旅」なる紀行文もある。

「東洋研究通報」はこの1908年版までである。

{ 172 }( 500/ /45 ; 第7130号) Ludwig Salomon”Allegeneine Geschichte des Zeitungswesens” Göschen'sche Verlagshandlung 1907 (Sammlung Göschen)

サロモン「新聞一般史」、1907年；徳華高等学堂図書館

[173](510/ /32；第6586号) P.Kayser “Die gesammelten Reichs Justiz-gesetze und die sämtlichen für das Reich und in Preußen erlassenen Ausführungs- und Ergänzungsgesetze, Verordnungen, Erlasse und Verfügungen” Sechste Auflage. Berlin (Verlag H.W.Müller) 1901

カイザー「帝國司法々規」、第6版、1901年；ドイツ膠州裁判所(DEUTSCHES GERICHT VON KIAUTSHOU)というスタンプがある。

(奥村訳：「帝國司法法規集成及帝國及プロイセンに於て公布された執行法規、補遺法規、指令及処分大成」第6版；全1234ページ。)

[174](510/ /33；第7282号) Friedrich von Stein”Aktenstücke zur Einführung in das Prozessrecht” Tübingen(Verlag von J.G.B.Wohr/Paul Siebck) 1907

シュタイン「民事訴訟法」、1907年；徳華高等学堂図書館

(奥村訳：「訴訟権入門のための文書」)

[175](510/ /34；第7283号) Fritz Holzhauer”Das Justizwesen in China in seiner gegenwärtigen Gestaltung” Tsingtau(Verlag der Deutsch-Chinesischen Hochschule; Gedruckt bei Adolf Haupt in Tsingtau) 1912

フリッツ・ホルツハウアー「中国における現行司法の本質」(奥村訳)

徳華高等学堂出版部の出版で、膠州図書館所属。印刷は青島の Adolf Haupt である。徳華高等学堂は1912年には本を出版するまでになっていたことが知られる。この本の副題は「山東県を中心として」である。ドイツが青島を中心として本格的に経営に乗り出そうという体制を整え始めていたことがわかる。

[176](510/1/35；第7284号) Max Mittelstein”Deutsche Binnenschiff-fahrtsrecht” Erster Band. Reichsrechtliche Bestimmungen. Zweite, gänzlich umgearbeitete Auflage. Leipzig(Roßberg’sche Verlagsbuhhandlung) 1903

ミッテルシュタイン「独乙内海航行法」；第一巻「帝國法規」；膠州裁判所

(奥村訳：マックス・ミッテルシュタイン「ドイツ内海船舶航行法」；第1巻「帝国規則」)

所有スタンプは「膠州裁判所(GERICHT VON KIAUTSCHOU)」とある。

[177](510/2/35；第7285号) Max Mittelstein”Deutsches Binnenschif-fahrtsrecht” Zweiter Band. Nicht-reichsrechtliche Bestimmungen” Leipzig(Roßberg & Berger) 1910

ミッテルシュタイン「独乙内海航行法」第二巻「帝国國法規ニ非ラザル規定」、1900年  
所有スタンプは「膠州裁判所」と判読できる。

[178](510//36；第7286号) Rudolf Wagner”Handbuch des Seerechts. Ein-leitung. - Personen des Seerechts” Leipzig(Verlag von Drucker & Humboldt) 1906

ワグナー「海上法」、1906年；徳華高等学堂図書館

(奥村訳：ルドルフ・ヴァーグナー「海上法ハンドブック」)

ハンドブックとはいえ、456ページの大冊である。

[179](510/1/37;第7288号)P.Kayser “Die gesammten Reichsjustizgesetze und sämtlichen für das Reich und in Preussen erlassenen Ausführungs- und Ergänzungsgesetze, Verordnungen, Erlasse und Verfügungen.” Fünfte Auflage. Berlin (Verlag von H.W. Müller) 1884

[152]と同一本の第5版。1884年。1184ページ。; 所有スタンプは「帝国膠州裁判所 (KAISERLICHES GERICHT VON KIAUTSCHOU)」とある。

[180](510/2/37;第7267号)P.Kayser “Die gesammten Reichsjustizgesetze und sämtlichen für das Reich und in Preußen erlassenen Ausführungs- und Ergänzungsgesetze, Verordnungen, Erlasse und Verfügungen” Sechste Auflage. 1901

[152]と同一本。; 「帝国膠州裁判所」のスタンプ及び「帝国海軍 膠州政庁 (GOUVERNEMENT KIAUTSCHOU)」のスタンプがある。

[181](510/ /38;第7297号)L.Schaeffer/L.Bähr “Grundriß der Civilprozeßordnungen in der vom 1. April 1910 geltenden Fassung” 4. Band des Grundrisses. ” Berlin (Puttkammer & Mühlbrecht) 1910

シェッファー「民事訴訟法概要」1910年; 徳華高等学堂図書館

(奥村訳：シェッファー/ペール「1910年4月1日発効予定の民事訴訟法概要」)

[182](510/1/39;第7311号)Josef Kohler (Hrg.) ” Zeitschrift für Völkerrecht und Bundesstaatsrecht ” 1. Band. Breslau (J.U. Kern's Verlag) 1907

コーラー「国際法及聯邦法雑誌」第一巻、1907年; 徳華高等学堂図書館

[183](510/ /40; 第7420号)Adolf Arndt “Allgemeine Berggesetze für die Preußischen Staaten in seiner jetzigen Fassung nach der Novelle vom 28. Juli 1909” ” Leipzig (Verlag von C.E.M. Pfeffer) 1909

アルント「普魯西普通鉱山法」1909年; 所属(不明)

(奥村訳：「プロイセン国家用一般鉱山法」)

副題から1909年7月28日に法改正がなされたことにともなう出版であることが知られる。

[184](510/ /42;第7428号)Karl Kormann “System der rechtsgesellschaftlichen Staatsakte, Verwaltungs- und prozeßrechtliche Untersuchungen zum allgemeinen Teil der öffentlichen Rechts” Berlin (Verlag Julius Springer) 1910

コルマン「法行為公文書論」1910年; 徳華高等学堂図書館

(奥村訳：コルマン「法社会国家公文書体系」)

[185](510/ /44;第7421号)Hermann Staub “Kommentar zum Gesetz betreffend die Gesellschaft mit beschränkter Haftung” Berlin (J. Guttentag

Verlagsbuchhandlung) 1903

スタウプ「有限会社に関する法令注釈(旧版) 1903年; 帝国膠州裁判所

(奥村訳: シュタウプ「有限責任会社に関する法の注釈」)

[186](510/3/99; 第7312号) Josef Kohler “Zeitschrift für Völkerrecht und Bundesstaatsrecht” 3.Band, Breslau(J.U.Kern's Verlag) 1909

コーラー「国際法及聯邦法雑誌」第三卷; 徳華高等学堂図書館

[187](560//19; 第6560号) Robert Brunhuber “Das Deutsche Zeitungswesen” Leipzig, G.Z.Götschen'sche Verlag, 1908(Sammlung Götschen Nr.351)

ブルンフーバー「独乙の新聞事情」1908年: 徳華高等学堂図書館

次に山形高等学校図書館で受け入れた期日を示す。それは今後の函獲書籍の受け入れや所蔵事情などの考察に貢献するはずである。なかには[154]「東洋研究通報」第2号(1895年)のように受け入れ期日や番号を示すスタンプがはじめさかさまに押され、それから訂正されてある場合もある。整理作業を急ぐ様子が彷彿とするかのごとくである。

昭和22年6月9日:[104][105][106][187]

昭和22年6月23日:[125][129][130][173]

昭和23年6月1日:[172]

昭和23年9月3日:[138]から[152]までと[153]から[171]まで。

昭和23年9月25日:[131][132][133][134][135][136][137][174][175][176][177][178][179][180]

昭和23年10月19日:[181]

昭和23年10月26日:[126]

昭和23年12月13日:[128][183][185]

昭和24年2月16日:[184]

昭和24年3月4日:[107]から[124]まで

函獲書籍の各学校の図書館登録については志村氏によれば、東北大学は大正11年と昭和3年であり、茨城大学も大正11年と昭和2年そして佐賀大学は大正14年であるという<sup>13</sup>。これに比較して山形大学の場合は遅い。今後山形高等学校以来の「寄贈書籍台帳」「洋書登録台帳」「洋書分類台帳」そして「(洋書)図書出納簿」などとの照合が事情を明らかにしてくれるかもしれない。(今回はそこまでおよぶことが出来なかった。)青島守備軍による「膠州図書館目録 補遺」に山形高等学校に対して11冊分配したという記録があるという<sup>14</sup>。従来この11冊が山形高等学校に対する分配冊数と考えられていたわけである。志村氏の恵贈による上記「補遺」の該当部分コピーの「山形/70173/6854/Grosclaude, Pardon Madame!」と「山形/70184/6855/Jourdain, F. Beaumignon」は当論文の[127]

と〔 1 2 8 〕に一致する。「70173」と〔 70184 〕は膠州図書館の円形スタンプ中の “ Ord.Nr ” ( 整理番号 ) に一致している。「補遺」は実際に配分された書籍の配分先台帳であると考えられる。また「補遺」には「山形/56491」「山形/56492」として “ Deutscher Flottenkalender 1911 ( ドイツ艦隊暦 ) ” と “ Deutscher Flottenkalender 1912 ” そして続けて「山形/56621/Jubiläums Kalender des Deutschen Frauenvereins vom roten Kreuz für die Kolonien 1913 ( 植民地赤十字ドイツ婦人協会 2 5 周年記念暦 ) ” が見られる。これら 3 冊は福島高等商業学校外国人教師ゲーテンビー ( E. V. Getenby ) と関係があるかも知れない。1 9 2 3 年から 1 9 年間同校で英語を教えていた同先生の「山形市内で発見され、福大図書館に収まった」<sup>15</sup> 講義用ノート 1 5 冊もあるが、この 3 冊の「暦」は渡邊氏が郡山の古書店から入手したゲーテンビー先生関係の書籍を収めたダンボール箱の中にあったという 1 2 冊の一部と題名等が一致する。<sup>16</sup> 山形高等学校に寄贈された可能性があるこの 3 冊の変転については不明である。

「青島守備軍陸軍参謀部」の「鹵獲書籍及圖面目録」と一致するものも少ない。〔 1 2 5 〕が「目録」の ( 頁 ) 「は 1 9 」の「一〇〇六」に一致する。〔 1 3 8 〕から〔 1 5 1 〕の「東亜研究」も ( 頁 ) 「は 2 0 」の「六九〇」と「一〇一三」に一致する。( 「一〇一三」は〔 1 5 0 〕。当初「欠巻」扱いのため追加) また「東洋研究通報」も同じページに記載があり、〔 1 5 3 〕〔 1 5 4 〕などが一致する。いずれも精査を必要とする。「鹵獲書籍及圖面目録」には洋書のみでなく、漢書もある。また洋書にしてもいわゆる文系書籍だけではなく、自然科学書も多い。これらも配分されたと考えるならば、山形大学図書館において今後さらに鹵獲書籍が確認されることもありうる。

<sup>1</sup> 山形大学図書館「110/ / 29」

<sup>2</sup> 志村恵：青島鹵獲書籍について、現在の所蔵を中心として ( 「金沢大学文学部論文集 言語・文学篇」第27号、2007。p. 28以下参照 )

<sup>3</sup> 「明治神宮聖徳記念絵画館壁画」p. 155

<sup>4</sup> ヨーゼフ・クライナー「ケンペルの見た日本」( NHK ブックス、1996 ) 参照

<sup>5</sup> 瀬戸武彦「青島から来た兵士たち、第一次世界大戦とドイツ兵俘虜の実像」同学社、2006、p. 25

<sup>6</sup> 瀬戸武彦「青島ドイツ軍俘虜、その事績・足跡」の「820」参照

<sup>7</sup> 同上「2330」参照

<sup>8</sup> ウッドハウス暎子「日露戦争を演出した男モリソン」( 上 ) 新潮文庫、平成16、p. 16

<sup>9</sup> 瀬戸「青島ドイツ軍俘虜」の「2282」「1546」参照

<sup>10</sup> 瀬戸、上掲書参照

<sup>11</sup> 瀬戸、上掲書参照

<sup>12</sup> 瀬戸、上掲書参照

<sup>13</sup> 志村、前掲論文参照

<sup>14</sup> 志村、前掲論文、p. 28

<sup>15</sup> 渡邊武房：鹵獲図書12冊( = 福島図書館研究所所蔵資料紹介シリーズ = その1 ; 文末に「2004.2.22」とある ) p. 1 ( 同氏はもと福島大学図書館職員。私設研究所の開設は平成12年という )

<sup>16</sup> 同上参照